

上田邦義氏と「能シェークスピア研究会」 Professor Munakata Ueda and “Noh Shakespeare Group”

三上 紀史

MIKAMI Tadashi

Abstract: Professor Munakata Ueda has attempted to set Noh melody to Shakespearian verse for many years, and created English Shakespeare plays in the traditional Noh style such as *Noh Hamlet*, *Noh Othello*, *Noh Macbeth*, etc. He thinks of Noh as Zen Theatre and put Zen ideas into his plays. Since he founded The Noh Shakespeare Group in 1981, he has put the plays on the stage one after another, performing each play himself as *Shite*. The Noh Shakespeare Group made a performance tour in the United States in 1988; I joined them, visiting 9 Universities or colleges and one drama research center (e.g. Harvard University, East-West Fusion Theatre) in 7 States. They performed *Noh Othello* and others, and were well received by American audience. Noh music is intrinsically based on Japanese language and culture, so Shakespearian verse should not conform to Noh music. But a professor of drama who saw the performance of *Noh Othello* during the US tour, said that he did not feel anything funny with the Noh chanting of Shakespearian verse because it was singing of songs. “Songs” essentially impair the usual function of language, and in another way, revive emotionally the different meanings of the words. Noh adaptation of Shakespeare is on the same condition. We expect that Professor Munakata will keep creating experimental English Noh plays as a forerunner on the field of English Noh as a kind of fusion drama.

Key words: 能シェークスピア研究会、英語能、「能ハムレット」、禪演劇、Noh Shakespeare Group, English Noh, “Noh Hamlet”, Zen theatre

上田邦義氏が瑞宝中綬章を受章されたと聞き、心よりおめでとうと申し上げたい。上田氏は長年、シェークスピア劇を古典能の様式で演じる活動を続けてきた。シェークスピア劇の原文の英語を謡曲の節にはめこんで囃子に合わせて謡い、自ら演じるという実験を繰り返してきた。氏は新しい融合劇の先駆的役割を果たしてきたのである。

上田氏と私は同じ師（三世梅若万三郎）を頂く謡曲仲間である。もともと氏の求めに応じて最初の謡いの手ほどきをした（確か「鶴亀」、「橋弁慶」、「吉野天人」まで）のは私である。また後年、私は氏が設立した「能シェークスピア研究会」（Noh Shakespeare Group）に参加して、一緒に演じた時期があった。ただ私が「能シェークスピア研究会」に参加したのは、設立されてからかなり後のことである。

1981年に、当時静岡大学の教授であった宗片（上田）氏が「能シェークスピア研究会」を設立するときに、氏は私に協力を要請してきた。私は多忙を理由に断りつづけた。シェークスピア

アと能を融合させる試みは、たとえそれが可能だとしても、忙しい時間をさいてのめり込むほどの意義はないと思ったからである。私は英語が、謡いの節や能の囃子に乗るはずがないと固く信じていた。能とシェークスピアを融合させることは、ライオンと虎を掛け合わせてライガーという珍獣を作るよりも難しいにちがいないと思った。

1983年の2月に「能シェークスピア研究会」は、矢来能楽堂で『能ハムレット・五場』を上演した。東京公演ということで、私もはじめて「能シェークスピア研究会」の公演を見る機会を得た。私はこれを見て意外に面白いと思った。しかし、まだ自分も参加して演じてみたいという気持ちにはなれなかった。私が『能ハムレット・五場』を見て面白いと思ったのは、『ハムレット』の原文の詩を厳選して、それを能の様式にはめ込み、さらに禅の要素を加えて、全く新しい『ハムレット』を作り上げた点であった。

シェークスピアと能を組み合わせることによって、それぞれの美点を消すというネガティブな作用を逆にとり、能でも『ハムレット』でもない新奇な劇を創り出したのである。さらに氏は、能を“Zen Theatre”と考え、“To be or not to be: that is the question.”を、“To be or not to be, is *no longer* the question.”に変え、オフィーリアの墓前でハムレットが瞑想から悟りに至るという禅の要素を取り入れたのである。上田氏の禅に対する関心は、氏自身が言っているように、氏が9年間薫陶を受けたブライズ (R.H. Blyth) 教授の影響によるものであろう（『ブライズ先生、ありがとう』p.85）。実は私もブライズ教授の最後の学生の一人であったが、私が先生から影響を受けたのは、禅や俳句ではなく、シェークスピア劇の人物像の分析であった。

1985年3月に、「能シェークスピア研究会」は、第6回公演として『能ハムレット・二場』を東京国立能楽堂で上演することになった。私に参加の要請はなかったが、上田氏から節付けされた台本が送られてきた。これは前作よりもさらに能に近い複式夢幻能のかたちをとっていた。私はそれを読み、実際に謡ってみた。意外にも謡曲の節が英語とかなり融合しているのに驚いた。というよりも英語に謡曲の節をつけて謡うという新奇さに興味をそそられた。

さっそく私は英語圏出身の教授たちの前で『能ハムレット』を謡って彼らの批判を仰いだ。すると意外にも、全体として不自然ではないという批評を得たのである。そこで私は第6回公演の『能ハムレット・二場』に参加する決心をし、地頭を務めることになった。私はこれを皮切りに、上田氏の次作『能オセロー』の第7回公演（1986年）と第8回公演（1987年）、そして1987年11月の『能マクベス』の公演に参加した。

「能シェークスピア研究会」は1988年の8月24日から9月17日にかけて、上田邦義氏を団長として、アメリカ公演旅行に出かけた。私も副団長としてこの公演旅行に参加した。我々は、コーカー・カレッジ、東西融合劇場、ハーバード大学、ブリガムヤング大学、カリフォルニア州立大学・ドミンゲスヒルズ校など、7つの州の9つの大学と1つの研究機関を訪問し、計10回の公演とワークショップなどを行った。演目は『能オセロー』ほかであった。

我々が『能オセロー』の稽古で最も苦労したのが、英語の謡いを囃子に合わせることだった。おそらく不自然な英語になっているにちがいないと思って、アメリカ公演中に演劇科の教授た

ちにその点を質問してみた。彼らの答えはみな同じで、「もちろん不自然な英語にはなっているが、歌とはもともと言葉を不自然にしたものだから、その点はあまり気にならない」というものだった。

『能オセロー』の公演に対するアメリカの観客の反応は、日本の観客の反応よりも概して良かった。それは古典能を基準にして見る日本の観客と違って、彼らが先入観なく、舞台芸術の一つとして外から見る公平な観客であったためでもある。しかし、英語を能の謡いや囃子に違和感なく乗せるという問題は、英語能の根本問題として依然として残っている。能の特質と英語の言語的構造の両方を知っている者は、実際に英語で謡いを謡ってみる前に、「英語が能の謡いに乗るはずがない」という思い込みを形成する。忘れてはならないのは、日常で使う言語と歌の言語の違いである。長年シェークスピアの詩を謡曲の節にはめ込む試みを続けてきた上田氏は、「時に見事なくらいはまり、全く違和感がない」と言っている（『日本経済新聞』昭和58年1月11日）。

日本では西洋の歌の節に日本語をつけて歌うことは、普通に行われている。日本の音楽に英語をつけて歌うのは不可能であると考えるのは、日本の伝統文化が、究極には外国人に理解されないと信じている日本人の偏見に似ている。歌の妙味は、言葉の意味と音がたゆたう詩を、さらに音楽に乗せて歌うところにある。言語の二重の崩しをこうむった歌は、楽器による音楽を伴うことによって、その言語はさらに崩されることになる。それでありながら、楽器の伴奏を伴う歌は不自然には聴こえない。とはいえ言葉の意味を無視しては歌にならないから、英語能の場合でも、できるだけ原文の意味や歌詞を生かす工夫をしなければならない。

英語能は何のためにあるのか。英語能は外国人に能をわかりやすくするためにあるのではない。能に国際性をもたせるためでもない。古典能はそれだけで十分国際性をもっている。国際性をもつものは、能のように地方性に根ざした特殊なものが、世界的視野の中でその価値を認められたものをいうのである。ただ能の台本が英語で、題材がシェークスピアであれば、外国人にとっては内容が理解しやすいから、古典能を見る前に、能がどのようなものであるかを理解する助けにはなるかもしれない。

英語能は実験的な融合劇としての価値がある。融合劇は野心的な演劇人ならば、食指を動かす領域である。彼らは舞台芸術という〈科〉に属するあらゆる形式の〈種〉を掛け合わせて新しい演劇を創造しようとする。これはいつの時代でも消すことのできない衝動である。上田邦義氏はまさにそれを実践してきた。私は氏がこの分野でますます活躍されることを期待している。

(大東文化大学名誉教授)